浄土

三月號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可　（毎月一回一日發行）
昭和十九年二月廿日印刷納本・昭和十九年三月一日發行

第十卷　第三號

安西覺承著
法然上人の和歌
B6版六十四頁　定價五十錢　送料四錢
上人の御作として確實な和歌二十首について一々懇切な語意、通釋、感想をのべた和歌註解の定本。上人の法の歌の中によく御遺德の結晶をみる。

增谷文雄著
行誡上人
B6版二百三十頁　定價一圓五十錢　送料十二錢
近世不世出の高僧、謹嚴にしてしかも脫俗洒々たる上人の風格、言行がそのまゝ信仰の現れである。上人に傾倒する著者が渾身描き出した全傳成る。

發行所　法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

林靈法著
法然上人を憶ふ
B6版四四〇頁　實費三圓（送料共）
著者は思想上に懊疑懊惱を續け、遂に凡入報ー に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の內に法然上人の教義をつゞつた。

（本會で取次ぎます）

○振替にてお拂込みの場合は何れも十錢增○

淨土　三月號　目次

表紙・卷頭カット……跡部白鳥
貯蓄決戰へ……（一）
合掌と悟り……吉田紘二郎……（二）
音痴の辨……田村弘二……（四）
宗教隨筆　とんちん物語……糸山天眞……（三）
もう一艦もう一機……岡本一平……（六）
信仰相談……（一〇）
歌壇……岩野喜久代選……（一三）
俳壇……太田耳動子選……（一六）
「慰問淨土」のお願ひ……（一六）
法語解說　混線して考へるな……中村辨康……（一四）
編輯後記……（一七）

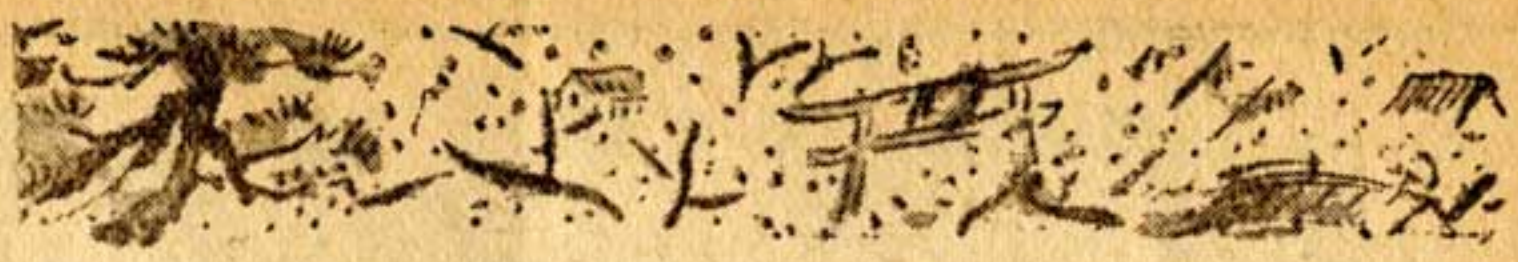
淨土　第十卷　第三號

貯金決戰へ

貯金へ、貯金へ、一錢も多くと、例へば敵を包圍殲滅するのに總ゆる方面から猛攻擊するやうに、國力增强の基礎たる貯金達成のためにいろいろと新しい方法が工夫され、その何れもが可成りの成績をあげてゐる。建國貯金、組合貯金、感謝貯金等々は申すに及ばず、更に各家々で零細ながらも毎日積立てゝゐるものも莫大な金額に達してゐる。例へば收入の何割かを別途に積立てる天引貯金、日常の炊事を合理化し、共同化して節約出來た金を貯へる豪所貯金、物を買つたり支拂ひをする際に必ずその一割を佛前に感謝をこめて貯へる佛前貯金等はその一つである。また德島縣美馬郡里町で實施してゐるといふ佛壇貯金といふのは、佛壇に貯金箱を安置して家族の一人一人が毎朝夕に總拜する毎に一錢づゝをその中に入るといふものである。

これ等は要するにわれわれにとつて國力增强の最も手近な道、貯金報國に誠を捧げんとする至誠の現れであるが、それと同時に勝つために盡さねばならない銃後の務めである。新たなる目標に向つて貯金をするのに金額の大小を問はない、絕えず少しづゝでも必ず積立てゝゆくといふことが大切なのである。大阪城の石垣は見事な巨石を使用してゐるので名高いが、これもよくみると巨石の空隙には小さな割石を以て埋めてある。ものの大小によりその任務の重要さが變る筈がない。

敵機の空襲が必至だから何々をするといふ。しかし實際は皇土の一角、內南洋で苛烈な決戰が繰り返されてゐるのであつて、空襲どころの問題ではない。皇土に敵が來てゐる。猶豫はない。總てをあげて先づ貯金決戰に猛進しなければならぬ。銃後の決戰は先づ貯金からである。



合掌と悟り

吉田絃二郎

今朝の新聞を讀むと、日本の或る種の會社の工員の作業率は、獨逸よりも劣り、アメリカよりも劣つてゐるといふことである。尤も中には齒ブラッシュ工場から轉業した航空機工場で、二倍三倍の能率を示してゐるところもあり、七割五分は女工員でありながら、驚異の能率を擧げてゐる工場もあるといふことである。

一機でも多くといふ聲を聽くのもかなり久しい今日、工員の中に一人でも時局を辨へぬやうな者のあるのは洵に歎はしいことである。

しかしこれは工員だけを責めるわけには參らぬ。日本人全體の責任に於いて考へなければならぬことである。殊に官に在る人、會社を經營してゐる人たちにも責任はないであらうか。徵用工一人を出すためには、その家族の人たちはずゐぶん生活上の苦勞を忍んで、御奉公に勇み立つて行くのである。工場の經營者たちが、各一人一人の工員たちを、充分溫かい心をもつて受け容れたであらうか。今日、會社の利潤をゆめみてゐるやうな幹部がありとすればまことに憎むべき行爲である。

今はお互が合掌しつゝ自分自分の仕事を勵むべき時である。會社の社長が朝早く工場の門に立つて、一人一人の工員を合掌しつゝ迎へたとしたら、能率の惡い工員も必ず、驚くべき良工員となるであらう。日本人は歐米人以上の良工員たるの素質を持つてゐる。もし或る工場の能率が惡いといふのがありとすれば工員に對する合掌の心が足りないからではあるまいか。

もし一切の私利私念を捨てゝ工員に合掌する社長があれば、工員も亦必ず社長に對して合掌するやうになるであらう。今日は社長も工員もお互に合掌して働かなければならぬ時である。工員も亦合掌の心を忘れてはならぬ

增產の隘路の最も大きなものは、石炭でも鐵でも、電力でもない。お互に合掌する心の缺乏にある。合掌する心のない人々の前に、いかにたくさんな鐵が置かれたとしても、錆びるに委せられるのみのことである。宗教的な精神の缺乏こそ最大の隘路である。

昔、元の大軍が玄海に押し寄せた時、藏人頭藤原爲世等は畏くも御前に於いて衣の裾を切り、決意のほどを示したといふことである味ふべく、銘すべきことである。

このころ報道班員の報告の中に、何の氣もなく記されたことであらうが、南方の或る新占領地の民衆が、最初は日本人に逢へば、自轉者を下りて敬意を表したのが、二年目には自轉車に乘つたまゝ頭を下げるやうになり、三年目には、見ぬ振りをして通り過ぎてゆくやうになつたといふことが書かれてあつた。

原住民そのものに、輕薄な植民地的な性格があるのであらうが、われわれとして反省しなければならぬ示唆がある。儼乎たるところがなければならぬ。同時に溫乎たるものがなければならぬ。他民族に輕蔑されるやうなさもしいところがあつてはならぬ。要するに宗教的な捨身、不惜身命の心がなくてはならぬ。

正しきは必ず勝つ。この信念を裏付けるためには、國民の一人一人が、正しき道を行はなければならぬ。その時はじめて神風が吹く敵の物量に對して魂を以つて打ち勝つといふためには、一人一人がよき工員となりよき官吏となりよき社長とならなければならぬ。一人一人が正しき道に生きなければならぬ。

×

今日は母の命日である。たゞ獨り淒む身はしみじみと香を焚き、母を懷ふ。

庭の隅の竹藪には、このころ朝早くから雉子鳩が啼いてゐる。獨り居て鳩の鳴く聲を聽くのもいゝものである。大德の淸話にもまして胸にひゞくものを感じさせる。人のゐない家の中では、ものの音といへば時計の時を刻む音と、庭に來るのじこやかしらだかくらゐの聲である。寂しいといふ氣がわかないこともないが、ありがたい修行でもある。

今朝北國の知人から良寛さまの繪を送つて來た。鉢の子を前に置いて坐つた良寛さまを描いたものである。その繪を展げてゐるといろいろなことが胸に泛かんで來る。良寛さまのやうな境涯に入ることができたらと思ふ心と、同時にまだいろいろな雜念が胸裡に潛んでゐることに氣付く。

良寛さまのやうな方でも獨りある日は寂しく、西行法師のやうな人でも雪の降る日は寒く感じたことをおもへば、悟られぬ身をあながち、欺つにも及ぶまい。悟られねばこそ人間の尊さもある。悟らぬまゝに死んで行けばこそ佛さまの慈悲もあらう。

一碗の茶を丁寧に飲む人がある。そのやうな人は人生を叮寧に生きる人である。自分では悟らぬつもりでも、そのやうな人は、悟りを見出した人である。五十年の朝夕を叮寧にありがたく生きてゆくことの他に、凡夫の悟りはないであらう。知るべからざる世界に悟りを見出さうとするところに迷ひがある。

一炷の香煙に幽玄の世界を想ふこゝろの落着きを持つ刹那、それが悟りであらう。

親しい人の死に面して腸を斷つほどに悲しむのも悟りである。花を見て、子供ほどの純眞さを以てよろこぶのも悟りである。悟りをばわが日常の生活外に覓めようとする人は、野狐禪に墮する。かく考へると悟りは容易いやうに思はるゝが、毎朝いたゞく只一碗の茶の味さへ眞心をこめて味ふといふことはなか〳〵容易ではない。たいていは不用意にいたゞきがちである。

昔の人が世を捨てたといふのは、一日一日、朝毎にいたゞく一碗の茶の味、一炷の香を靜かに心ゆくまで味識せんがためであつたとも考へられる。そこから幽玄世界への叡智の生活の門が開かれるであらう。

悟らぬ身と思へばこそ精進もある。邁進もあり、苦行もある。一生涯を悟り得ぬ愚者として、自分をはげまし、自分を磨き上げ、深くしてゆくところに宗教がある。このやうな精進者の死顏の上にはじめて尊い悟りの光りが見出さるゝであらう。

音痴の辨

田村弘二

十數年前の小學校六年生と云へば入學試驗なる難關を目指して、その準備のためにすさまじい敢闘精神を燃えたたせてゐたものである。授業前に一時間、放課後に二時間の補習を受け、夜はまた近くの塾に通つて晝夜兼行の勉學を續けてゐた。先生も父兄も夢中だつたし、當の生徒も激勵されては一門の名譽をかけての猛進擊を强行した。私など吹雪に下駄をとられて素足で深夜の街を馳けて歸つたこともある。

これ程までに精を出しても、生徒の中には餘り成績の擧がらぬ者もある。當時私たちはこんな連中に對して「あれは音痴だね」等と自分の方は棚にあげて生意氣を云つたものである。これが即ち音痴なる言葉を口にした最初なのだが、しかし「音痴」のほんとの意味とは別に使つてゐたわけである。ほんとの音痴といふものが外ならぬ私自身のことであつたと知るにいたつたのは、迂闊千萬な話だが四十歳に間のない今日この頃のことである。

まあ、考へてみると私の音痴ぶりは相當なものだつたと思ふ。先づ私が歌を唄つて賞められた記憶はいくら探しても一度しかない。それも獨りで祖父母の家に遊びに行つてゐた四歳の時のことである。忘れもしないその歌といふのは「箱根八里は馬でもこすが……」の一句で、それも調子が上手だといふのではなく、「越すに越されぬ大井川、ホイホイ」といふホイホイの掛聲が子供のことで面白いと年寄りが賞めてくれたものらしい。餘り自慢にもならぬわけである。

それから思ひ出としては小學校四年の時の唱歌の試驗を今でも忘れずはつきり憶へてゐる。その折の先生は甚だ異色にとんだ人であつた。先生が赴任するや、早々に教室の床板の隙間に蠟を流し込ませ、生徒には全部上履きを脱がせて教室に入れたものである。小鳥の巣のやうな頭の型も私達の驚異であつた。その先生が試驗當日に新調のピアノを彈き、それにつれて生徒が一人づゝ唄ふのであつた。先づ私が最初に呼ばれて起つた。するとすぐ先生はピアノを彈き始めてくれた。だが一方、肝心の私は何んと唄つてよいやら歌の文句を胴忘れしてしまひ默つたまゝ起つてゐた。こうしてまごまごしてゐる内にピアノの曲が終つてしまつた。呆然としてゐた私に對して、先生はいきなり「市橋！後ろに立つてゐなさい」ととげとげしく命じた。さて私の次の番には石黑といふ下駄屋の伜が呼ばれて起つた。彼は大きな目玉をクリクリさせながら、ピアノにつれて大聲を張りあげ張りあげして唄つた。私は教室の片隅に立たされながら

「出目金の奴、見事な出來だワイ」と感心しながら聞き惚れてゐた。ところが意外にも歌が終るや否や、先生は苦々しさうに「石黒！後ろに立つてゐなさい」彼にも同じことを命じた。どうやら石黒の唱歌は聲だけ無類に大きかつたが調子の方が全く以て出鱈目で、ピアノが終らぬ内に歌が終つてしまつた爲逆鱗にふれたものらしい。つまらなさうに私の傍へ來て立つてゐる石黒の顏をみて、私はなんだか朗らかになり、もう少しでふき出す所であつた。

それから後、小學校から中學校と、毎學期の唱歌の試驗を何うして通過してきたか全然憶へてゐない。「唱歌は肺のためによい」等と友達と議論したことはあつたが、唄つたといふ記憶が全くないので、唱歌のためによく落第しなかつたことだと不思議に思ふ。更に後、軍隊に入ると軍歌演習といふのがある。夏などは夕食後のこの演習が實に愉しいものである。氣持が浮々して洗面所等でつい獨りで軍歌を口ずさもうとしても、演習が濟んだ瞬間、ものの見事に忘れてしまふので一句も口から出て來ず、フト嫌になつたことを憶へてゐる。軍隊での娯樂會、動め先での宴會で藝を強ひられ、內心隨分困つたが、無理に唄つて若し他人に不快を與へても如何と考へ「俺は唄ふまい」と決心してゐたので、事實また唄つたことは一度もなかつた。

それでもまだ私が音痴であることに氣がつかずにゐたのである。それがいよ〳〵成程これがほんとの音痴なのだと判つたのは、矢張り私が歌を唄つてみて初めて知つたのである。この歳

まで絶對唄はぬ爲に人知れず鬪つてきたのであつたが、遂に唄はずにはゐられなくなるものである。それと云ふのは二人目の子供が生れた爲である。何故なら長女の方をどうしても私がねかしつけなければならないはめに陷つたに外ならない。そして長女は何か歌を聞かぬと決して眠らない。目をこすりこすり頑張つて子守唄をせがむ。泣く子に勝てぬ道理で、父親たるもの二十何年振りかで長女を抱きながら止むなく遂に唄つた。歌と云つても一つか二つしか出來るわけでない。やつと考へ考へ唄ひ出したのが、

「鳩ポッポ」の唱歌である。「ポッポッポ……」

とまでは云つてみたが仲々後が出てこない。相手は四歳の女兒である。勇氣を出し丹田に力を入れて唄はうとするが、妙に聲がのどにからんで出てこない。呑氣さうに抱かれて私の顏を眺めてゐる長女を見ると、親の心子知らずとはこのことかとほんとに情なくなつてくる。思ひ餘つた私は「さあ、早くねんねするんだよ」となだめにかゝつた。すると長女の云ひぐさがよい「お父うちやま、うた下手ね」と云つた。餘りの筏言に驚いてゐると、親の私をさしおいて今度は長女が自分で「ポッポッポ」と唄ひ出してしまつた。これには私も參つた。子供は罪のないもの、自分で知つてゐるだけ唄つてから、そのまゝ、寢込んでしまつた。それから以後は長女も私の音痴をさとつたとみえ、夜私に抱かれると、「歌はいや、はなしてヨ」と桃太郎の話をせがむのであつた。

鈴木金平畫

もう一艦もう一機

＝國民歌謠ものがたり（二）＝

岡本一平（文と畫）

押しくら　押しくら
米英眞向きに　押しくら
なによりもつて　押しくら
空にや飛行機　海に船
生産自慢で　數で來る
押されてなるか
値へ負かして　押返せ
ソレもう一艦もう一機
ソレもう一艦もう一機

季節は小寒から大寒に入り、ほゞ晴天續きの日々はいよ〳〵本格の寒さとなつた。凌寒苦吟十日間——まあそんなことはどうでもよろしい——ともかくも「もう一艦もう一機」この標語をタテに二篇の歌謠を作つた。時局柄つて來官より二たは指導團體より國民に與へる標語がたくさん出來た。それ等の中には勸奬の趣旨も徹りしかも妙味津々たる成語も少からず見出される。後世、時局中の文學を研究する人あり、そしてもしこの標語の文字類に留意を怠つたら恐らく時代を反映した好箇の資料の一部を失ふことになるであらふ。

「もう一艦もう一機」も確に標語中の傑作の一つである。これは關係の官廳側が國民に戰力增强の源泉として國債や貯蓄を勸むるために使つた標語であることはすでに大方がご承知であらふ。國民箇々には零細と思へる財力も愛國の念によつてこれを凝らせばくろがねの艦ともなり天翔ける飛行機ともなる。しかも戰況がその必要を喚ぶこと急々如律令、實行は猛に急速を要し、急速は繼續を要す。その努力は弛ますべからざるのみならず多々ますます〳〵善けん。かゝる道理を象徴し國民自發の敵愾心に訴へて即銘即行を決せしむるに、「もう一艦もう一機」は標語の任を盡してけだし餘蘊ない。服膺すべきのみ。

さはさりながら標語には標語の持つ職域あり歌謠には歌謠の持つそれがある。影響支配の對象また從つて差あり。人々の趣味機根多般なるが故なり。標語として餘蘊なきものもこれを歌謠の世界に移し植ゑて別量の收獲を得んこと必ずしも難きに非ず、かの本歌による俳諧等然り、のみならずこの標語の宣る趣旨が重要であればあるほど、いかやふに手を盡してなりと徹底を期すべく、作詞に携はるもの亦歌謠によつて一分の任を擔取すべきなり。これ敢て駑馬に鞭打ち禿筆を呵せし由縁

この篇の歌謠は前述の章を冒頭に四聯章より成つてゐる。第二章は敵も必死、消耗を覺悟で來ること、第三章は飛石作戰反攻執拗を極むることを說いた。それをなし得るも畢竟相手は數を恃めばこうである、しかも我方に於て押されてならないのは絶對的の建前である。

我軍の將兵諸士は世戰善戰、一騎當千の武

勇をもつて續々大戰果を擧げられ、誠に感謝に堪へない次第であるが、近代戰の性質上、戰局なるものはある程度まで物量に支配されるものだといふ。數には數をもつて報いよ。この戰の前、實に驕つて銃後のわれ〳〵の双肩に在る。されば身も心も武器生産の坩堝に投入れる想ひをなし明けても暮れてもソレもう一艦もう一機、立つにつけ座るにつけソレもう一艦もう一機、かくいそしむ姿こそ決戰段階下前線の御苦勞に應ずる道であつて、共に圍ふ意識に充ち滿たされる。故に第四章にいふ。

押しくら、押しくら
前線勇士は　お待兼ね
なによもつて　お待兼ね
空にや飛行機　海に船
叩けど叩けど　數で來る
待たしてなろか
勇士よ送るぞ　どし〳〵と
ソレもう一艦もう一機
ソレもう一艦もう一機

私は歌謠が出來上ると一應、茶の間へもつて來て讀んでみせる慣はしとなつてゐる。茶の間の連中に判らんやうな歌謠ならまづ通俗性に於て落第である。

娘のいづみは明けて四つになつたが、讀むを聽き終つて、「もう一カーン、もう一キー」とひとりでに口誦さんだ。それから「押すやれてなろか」とも口誦さんだ。他は知らずこの二箇所だけは童心にも魅力ある韻律なりと見ゆ。

時局以前、音盤會社が一つの歌謠を賣出して、流行の樣子を觀るのには銀座を標準にしたさうだ。「銀座で謳ひ出したからもう占めたものです」會社の宣傳係はこんなことをいつた。時局まへ文化の爛熟した趣味性を代表するものはいはゆる銀座のモボモガであつて彼等の嗜好に訴へ得るものまた一般子女をも支配するかに見ゑた。時局は世紀の幕を切つて落した。廢頽的なるもの、懷疑的なるもの、末梢神經的、感傷的なるもの、安易にして偸樂的なるもの——一括して世紀末的なるもの——は世界の果へ去れ代つて新時代を擔はんものは理想の旭光を浴び得て現實の霜雪を凌ぐ志氣卓拳たるものでなければならぬ。これ決して難しいことではない。わが國民の傳統性上に立戻り、神素なる民族本能の聲に耳を傾くべく、童心の不疑純粹を感ずれば足りる。以上のものゝ中にあに輸入文化に毒されたるところあらんや、疲、飽、怠、惑あらんや。

いつの時代でも時代の更新といふことは弛

緩と末梢に墮ちたものが引締められ、迷路雜岐に亙つたものが統べられることである。これを本朝の佛教史上に觀ても奈良末期が平安初期に反れる、平安末期が鎌倉初期に反れる思半に過ぎやう。鎌倉期新興佛教の先達上人が「一文不知の尼法師になりすまして」といふことは無智を奬勵することでは決してない但純一無雜の信に徹せんため雜亂を來す空廻りの知識はこれを避けよといふことであらふ越後の良寛が萬葉風の和歌を詠み童心を重んじたのも德川中期より末期へかけての弛緩虛飾に堪へずて、そこに無垢眞劍なものを見出さうとしたからであらう。

日本民族は恒に日本民族である。たま〳〵世紀末的に陷らんかにみえて、必ずその隋氣を一掃し新時代へと乘越して行く。時局まへには流行歌謠の對象であつて一般子女の好尙を左右したかにみえたいはゆる銀座のモボモガなるものも時局に氣付けば直ちにその外皮をかなぐり捨て、勤勞に報國し挺身する健康なる青年男女であつた。本來の面目これ日本人だからである。それゆゑ今日歌謠を作つてこれを鑑檢して貰ふにはどこの誰といふことは無い同胞どなたでも結構なのだが、私は時間の都合上、まづその通俗性を茶の間の連中に問ひ、純情無垢の如何をこどもの童心に塑へてみるのであつた。

折しも夕飯どきであつた。けふは八百屋さんからたくわんの配給があつたといふのが食卓上の鉢に盛つてあるのだがその一部分はうみふやけこまかく切つてある。古かつたのかと訊くといえよいおたくわんでしたが臺所で支度をしてる暇にこどもたちが弄つてしまつたので勿體ないからそうしてしまつたのですと主婦は笑つていつた。なほ詳しく訊くといづみはたくわんの切れを取つて茶呑茶椀の中に入つてゐた湯でお洗濯をしたのだそうである。ところが茶椀を覆へして湯を食卓にこぼしてしまつた。いづみは今度はたくわんを布巾にしてこぼした湯を拭いたつもり、その布巾のたくわんを火鉢の緣に干した。すべて母のすることを見やう見眞似であらふ。おさなき姉のすることを見てゐて自分も何かしたかつたのであらう弟の和光はたくわんの切れに火箸を突き差し灰の中を搔き廻したくわんのあべ川を慴へて「うおううおう」といつて差上げてゐた。そこへちやうど主婦が臺所から戻つて來たのだそうである。

數へ歲四つと三つになり立ての姉弟のことを怒りもならず、苦笑しながら「なぜそんなことをしたの」と問ふと、詰られるこそ不審の至りといふ面持でいづみは答へた「だつて——洗濯ちまちよ、きゐいにちまちよちよ——つてご本に書いてあるでちよ」云々。傍から和光もよき勤勞を分つたつもりを報告したげにしかしこれはまだ言葉ができないから「うおううおう」と口を尖らしてそこゝ指した按ずるに、志や切なり、問題は方法論に在り矣。

私は右の歌謠の他にもう一篇作つてつまり二通りの作詞を要請の向きへ送つた。私が子供のときである、書家であつたおやぢは私の

會費を改めます

今度郵便料金が改正され、一部送料が金二錢になりますので、本會會費を四月から金一圓六十八錢（送料共）に改めます。尙振替にて御拂込みの際は振替料金十錢を加算の上、**一年分一圓七十八錢也**を御拂込み願ひます。

すでに御拂込みの會費は、當方にて計算いたし、若干會費前金切れが繰り上げとなるものも御座いますので、何卒御諒承下さるやう願ひます。

書く字を見て「字書きより畫描きになれ」といつて畫家のところへ弟子入りさした。まだ自分は畫が好きか嫌ひかその天分ありやなしや思ひも考へない少年の時分である。しかしおやぢが定めたことだうまからうが拙からうが職業は畫描きとして生涯を押し通すのがせめて親孝行だと思つてゐる。それで作詞のやうなものもお役に立つのを重々悦びながら資格はいつも素人として長章のもの以外出來るだけ正副二通り以上を作つて望み手の選擇に任すことにしてゐる。これぞ歌謠を職業として生活してゐる作詞專門家に對する禮讓であるやうにも思ふ。

却説、話は始めに戻り、私が作つた國民歌謠の貧しい經驗に照してもいかにわが國民の士氣の昂揚が逞しいものであるかを述べ續けやう。

「隣組」の次に需められて作つたのが、「防諜」の歌謠である。

スパイにほひのご飯とみたら
用心せい　用心せ

スパイにほひの　住居とみたら
住みなさるなよ　腐つてる
用心せい　用心せ

スパイにほひの　人間とみたら
寄りなさるなよ　毒がある
用心せい　用心せ

スパイにほひの　着物とみたら
お着なさるなよ　濕つてる
用心せい　用心せ

スパイにほひの　喰べなさるなよ　饐てゐる
用心せい　用心せ

スパイの用心をこどもにも口誦めるやうに作るのは相當難かしい。それで衣食住に因ませもぢつた言葉を使つて、平易にし調子を出したのだが、まだ防諜問題が唱へられ始めの當時に於てこそ、一般に關心を持つて貰ふにはどうやらこの程度のものでよかつたかも知れぬが、今日では手緩い。もちろん防諜の必要はもう誰でも百も承知、だがそれだけ敵は反間苦肉の策を弄し、微妙な方法で思想に向つても茶毒を及ぼさんと謀つてゐるに違ひない。

故にもつと深刻な攻勢として敵の謀略には用心、且彈ね返し負かす心身の鍛錬こそいよ〳〵望ましい。

（つゞく）

信仰相談（質問歓迎）

擔當　中村辨康

戰死と淨土往生

（問）皇軍將兵が盡忠報國の念に燃えて敵彈の爲に戰死した時、念佛を唱へる暇もなくそのまゝ護國の英靈となり、七生報國の精神にして魂魄と成り國を護る時、淨土宗は西方淨土往生を認めますか如何でせうか。（盛岡市八日町・田中一郎）

（答）此の御質問の假定の中には重要なものが一つ抜けて居ります。それはその戰死した英靈が淨土の信仰を持つて居たか何うか。それとも他宗教の信仰を持つて居たのかも知れないこと。或は全然定つた信仰を持つて居なかつたかも知れないからであります。これが判然しなければハッキリしたお返事が出來兼ねるのですが……

然しながら御質問の趣旨は念佛の信仰を持つて居た人が念佛する暇もなかつた場合のことと思ひますので、さう云ふ意味で御返事いたします。

そこでまづ淨土の行に就いて考へて見ますと、大體五種又は六種と言つて居りますけれども、結局身業と口業と意業との三業に歸するわけで、わけても口業の稱名正行を以て最も適確な行として居るのは御承知の通りであります。それは畢竟するに行の標準點を何處に置くかと云ふことから來て居るのであります。身業に重きを置くか、意業に重きを置くか、小乘教は主として身業に重きを置いて居りますし、大乘教中聖道門の諸教は意業に重きを置いて居ります。

隨つて何れも難行道と云はれるのであります。小乘教の三十七道品にしても大乘教の六度四攝にしても容易のことではありません。ですからそれ等の諸教は或る限られた特定の人のみの宗教となつて萬人に向かないのであります。この故に萬機普く利益し得られるところの行は口業でなくてはならぬことになります。淨土教が稱名の口業に重點を置いたのは「萬人を悉く救ふ」と云ふ爲だからであります。

然しながら、だからと云つて稱名の口業さへして居れば、身業も意業も不問にして置いて差支へないと云ふのではありません。身業の精進も意業の清淨さも皆必要でありますから、三業共に重きを置きはしますが、正面から、三業を悉くよくすると言ふのでなく口業を通して段々三業を調へて行くのであります。そこに「信仰生活」の生活たる所以もあるのであります。即ち念佛心を持つた身業意業も出て來るわけで、盡忠報國もまた念佛心に依つてなされる身業であり、意業でありますから、たとへ口に念佛が出なかつたとしても決して念佛がたかつたとは言へないのであります。この故にその人も淨土往生可能なりとの斷言が出來るのであります。

尙これに就いては、まだ問題が殘つて居ります。例へば魂魄の問題、七生報國と往生との關係などで、これは非常にむづかしくなります。今はそれに觸れないことに致します。

崇りと道德上の制裁

（問）世間ではよく病氣に罹るとか凶事にあひますと、「神佛の祟り」又は「亡者の障」などと申しますが、事實先祖が祟るやうな事があるのでせうか。之は先祖に對して爲すべき務をして居ればそんなことは無いと思ひます。それを知りつゝ亡者に失禮なことをしたから「氣病」にかゝつて病氣になるのではないでせうか神佛を粗末にするやうな人は平素においてもよいことがあらう筈はないと思ひますが如何でせうか。

（山口・阿月・下松勝滿）

（答）これは前にも申したことで「信仰問答」の中にも集錄して置きましたが、それには先祖諸靈中の一亡靈が特別にその子孫の誰れかに祟りをなすと云ふやうなことは有り得ないと云ふことを申して置きましたから、委しくは「信仰問答」に就いて御覽を願ひたいと思ひますが、茲では主として神佛の祟りと云ふことが有るか否かに就いて申し上げませう

結論から先に申し上げますと、「祟り」と云ふものは「ない」のであります。若し有るが如くに感ずるならば、それは御說の通り自分の氣にとがめるところがあつて怯懦になつて居るから、病氣になつたり災害にあつたりすると、それをテッキリ「祟り」だとしてしまうのであります。

元來「神」の考への中では、支那に於ては神とは「鬼神」とか、「惡神」とか言ふ惡魔的な、極めて依估劣の多い手前勝手な靈力を持つ存在であつて、日本で言つて居る「神樣」とは丸で意味が違ふのであります。ところが後世になつてかうした「神」も日本の神の思想の中にはいつて來て混線してしまひましたから、一般人はそれ一つに考へて居りますし、一方「亡靈」も亦その神の如き靈力ある仲間の一人になつて居るかの如く考へてしまつたのであります。

また更には印度の神々卽ち婆羅門教の神々が佛教の中にも取り入れられて「破壞の神」の如き魔神が色々な形で考へられます。で例へばマケイシュラ天とか鬼子母神とか惡鬼、羅刹、夜叉等の魔神が混入し、それが佛教と共に日本へも渡つて來まして、愈々神佛思想の中に惡魔的な性質が添加されたのであります。

ことに佛は慈悲を中心とするもので、佛としては大慈悲以外の性格は絕對にないのですから惡魔的な祟りのあらう筈はありません。然るにも拘らず尙佛にも祟りありとするのは前述の如き混線から來て居るのでありまして大きな間違ひであります。

中には「佛罰を被る」と言ふ考へを持つものもありましたが、それは制誡の上に言つたものであつて「子弟教養」の爲のものであります。隨つて「地獄」と云ふやうなことも道德上教誡上のもので、要するに刑罰を恐れしめて惡惡進善せしめんとする意圖から出たものに過ぎません。

また我が國の「神」の考へに致しましても謂ゆる「八紘爲宇」の廣い大らかな心を中心として居るものであり、惡神などは大はらひに拂ひ捨て鬼やらひに追ひやらはれねばならぬものであります。イヤ「神」の考への中から、さうした考へを排除するところに正しい「神の觀念」が成り立つのであります。

この故に若し神にしても佛にしても、「祟り」をしたり「佛罰神罰」を與へたりすると考へるならば、それは惡神であり惡魔であつて正しい神でもなく正しい佛でもありません。但し原始宗教の神の中には「恐怖觀念」を基礎にして漸次出來上つたものが相當多數ありますから、それには當然「罰」と云ふことも考へられ、その聯想から「おべつか」を使つて「神」

を喜ばすならば逆に「幸福」が授けられるとする觀念も出て來て、「月詣り」とか「お百度詣り」とか其他色々な問題が生じて來ますが、皆な是れ功利觀念の然らしめたもので、恐く間違ひでありま す。恐怖觀念からする「神」の思想は極めて幼稚であります。高等な宗教に若し恐怖觀念があるならばそれは過去の遺傳が添加したものでむしろ取り去られねばならぬものであります。ですから「罰」とか「祟り」とか云ふものは絶對にある筈のものではありませんから御安心下さいと云つて「爲すべきつとめ」をなさなくても差支へないと云ふのではありません。罰や祟りをまぬかれる爲に「つとめ」をすると云ふやうな功利觀念でなく、當然なすべき義務としてつとめ得る限りのものをなして頂きたいのであります。

若し「祟り」や「罰」がないならばすてゝ置いてもかまはぬと云ふならば、その人にこそ大きな災禍がふりかゝつて來るでせう。それは天地宇宙の秩序を破るものでありますから當然「幸せ」になる筈はありません。天地はそんな横着者の存續をゆるす譯がありません。ですからさう云ふ人には理窟よりも「おどかし」でおどしつける方が手取早いから「罰」だとか「祟り」だとか云つたのでありませう。

雨とその縁起

（問）お嫁さんやお婿さんは雨降りの時にくれると根付くと申します。また子供が生れる時雨がふれば「甘露の雨」と言ひ生死別れの時に雨がふれば、「涙雨」と言ひ、お葬式の時に雨がふれば「やらずの雨」と言ひます。またお婆さん達も雨が降ればお寺參りします。そしてそれはみ佛樣に信心を根付かせて頂くのだ。だから佛樣では「甘露の雨」と言ふのではないかと思ひます。答を淨土にのせて下さい。お願ひ致します。（青森・東津輕、丸尾久一）

（答）さう云ふことは存じません。そちらで御考へ下さい。

歌壇

岩野喜久代選

大分　廣本政敏

哀しみは天を衝くべく地も裂かむ
マキン、タラワを一億の哭く
日本の血うけし者ぞ死ぬときは一
千五百の軍屬も散る
五メートル掘らば海水ふき出すて
ふ塹壕にゐて神兵たたかふ
七百トンの爆彈あびてその中に阿
修羅のごとく神兵たたかふ
一兵の援だに請はず南海の孤島に
散りしつはものを念ふ

（評）廣本氏のマキンタラワ兩守備隊の玉碎を哭した歌一聯を全部採つた。悲痛の情肺腑をつき、憤激眦を裂きその底に靜かに動せぬ鐵の如き決意を湛えた佳作である。國民は等しく同じ思ひをしつつと堪へつつ玉碎せる勇士に報いる道に精進することであらう。勇士等のみ魂安かれ。

京都　井茂雄

防人にささげし吾子は御下賜の義
足ふみしめ麥田打つかも

北海道　平井正念

十二月八日を迎へまた一つ母は誓
ひぬ草鞋つくりを

清水市　遠藤政子

大君のみ楯と心決しなば死も生も
なしまして苦、樂、悲、喜など

靜岡市　彦坂敏夫

造船の料にもなれと屋敷木の欅の
巨木丁々と伐る

京都傷痍療養所　松村市三郎

東の白み初めけり病院の霜ふみ
立てば癒ゆる思ひす

投稿規定　官製ハガキ一回二首以内淨土短歌壇歌壇係宛に送ること

宗教隨筆

糸山天真文
窪田五雲画

『叩げば聞し、我師の恩』と和やかな旋律が唱歌室から流れて來ます。

月日の過ぎつのは春の夜の夢の如く、之で此の小學校も、お別れかと思ふと、今迄叱られて、こわいと思つた先生すらも優しく思えて、諸先生やお友達に別れるのが今更乍ら悲しく、惜別哀愁の念に閉られる豚珍です。

卒業と云ふ嬉しさからなのでせう。平素餘り訪ねて來た事も無い金持の子に『豚ちやん一緒に學校に行かふ』と呼び掛けられて、元氣良く豚人で寺を飛び出しました。

すると參道の前の道端で例の通り、汚い粗末な勞働服で泥濘の塵芥をしきりと揚げてゐる年寄を見た金物の子が『君、あれ、誰なの』と聞きました。

『あれか、あれは僕を可愛がつて呉れる老師』と咽喉を出てゐたのですが、いかんせん例の通りの見すぼらしい有樣なので子供心にも氣恥しく、『うん、あれは寺の爺だよ』と思はず答えてしまつたのでした。

平素耳が遠くても、悪口の方は逸疾く聽えるのでせう。老師は掃除の手を止めて無言で豚珍を熟つと見つめました。

こわい中にも一入淋しい様な老師の目付が、豚珍の腦に焼印でハッキリと焼き付けられた様に印象づけられて、卒業の悦びにふるへる處の餘ぎで無く、

濟まない氣持が先きになり目先が暗くなつて身の縮まる思ひ、訓辭を聞いても生徒の名前を呼ばれても、うはの空で、さつぱり耳に入りません。

『おい、豚ちやん、優等だよ、御褒美の辭書を早く貰ひに行かなきや、校長先生が見廻して待つてゐるぢやないか』と友達に肘をつゝかれ、半ば失神狀態の處へ、思ひ掛けぬ事で、悲喜交々、氣が遠くなり相で、まご〳〵してゐると、擔任の先生が馳け寄つて、『豚珍君、早く立つて！』と促がされて、急に胸が一杯になつて、しく〳〵泣き出しました。

『一體、如何したの』と先生に慰められて『御褒美は僕が貰えるのぢやない。老師の御蔭なんです』——良心の閃めきと云ふのでせう——そう卒直に答えた時、擔任の先生も校長先生も『うーん』と唸りました。

『何と云ふ純眞な氣持でせう、少年乍ら、自らの力を誇らず、養育して呉れた老師の厚恩を泣いて感謝する其のいぢらしさ、斯ふ云ふ生徒を社會に送り出す事は、吾本校の最も誇りとする處で有ります』と訓辭に附け加へて、我が事の如く胸を張つて校長先生は得意氣に多くの來賓を前にして其の行爲を賞め讃えました。

老師を寺の爺とつい云つた事が、心濟まない氣になつてゐた折柄、問はるゝ儘に老師のお蔭とすら〳〵と何氣なく云つた事が、端しなくも怪我の功名となつて、すつかり褒め上げられて豚珍も何と無く、くすぐつたい様な、氣恥しい頓珍漢な氣持です。

講堂の控席に慎ましやかに控えてゐた老師は之又感極つて『憎い程可愛い豚珍奴〳〵』と老ひの目をしばたゝいて熱い涙をぽろり〳〵。

混線して考へるな

……法然上人法語解説（其二六）……

中村辨康

法語

問ふて曰く、聖人の申す念佛と在家の者の申す念佛と勝劣如何。

答へて曰く、功德ひとしくして全くかはり目あるべからず。

疑ひて曰く、この條尚不審なり。その故は女人にも近づかず不淨の食もせずして申さん念佛は尊かるべし。朝夕に女境にむつれ酒をのみ不淨食をして申さん念佛は定めておとるべし。功德いかでか均しかるべきや。

答へて曰く、功德均しくして勝劣あるべからず。その故は阿彌陀佛の本願の所以を知らざるものの、かゝる可笑しき疑をぼするなり。然る故は昔阿彌陀佛二百一十億の諸佛の淨土の莊嚴寶樂等の誓願利益に至るまで世自在王佛の御前にして之を見給ふに、我等如きの妄想顚倒の凡夫の、淨土に生るべき法のなきなり。されば善導和尚釋していはく一切佛土皆嚴淨、凡夫亂想恐難生といへり。この文の心は一切の佛土は妙なれども亂想の凡夫は生ることなしと釋し給ふなり。各の御身を計ひて御覽ずべきなり。

そのゆへは口には經をよみ身には佛を禮拜すれども心は思はじことのみ思はれて一時も止まることなし。然れば我等が身を以て如何でか生死を離るべき。かゝりけるほどに曠劫よりこのかた三途八難を住處として燃猛火に身をこがして出づる期なかりけるなり。

この故に阿彌陀佛五劫に思惟して建て給ひし深重本願と申すは、善惡を隔てず持戒破戒を嫌はず在家出家をも選ばず有智無智をも論ぜず、平等の大悲を起して佛になり給ひたれば、唯だ深く本願を信じて念佛申さば一念須臾の間に阿彌陀佛の來迎に預るべきなり。

問ふて曰く、心のすむ時の念佛と妄心の中の念佛とその勝劣如何。答へて曰くその功德均しくして敢へて差別なし。

疑ふて曰く、この條尚不審なり。その故は心の澄む時の念佛は餘念もなく一向極樂世界のことのみ思はれ彌陀の本願のみ案ぜらるゝが故に交ふるものなければ淸淨の念佛なり。心の散亂する時は三業不調にして口には名號を唱へ手には念珠をまはすばかりにてはこれ不淨の念佛なり。いかでか均しかるべき。

答へて曰く。この疑をなすは未だ本願の所以を知らざるなり。阿彌陀佛は惡業の衆生を救はん爲に生死の大海に弘誓の船を浮べ給

へるなり。譬へば重き石かろき麻殼を一つ船に入れて向ひの岸にとづくが如し。本願の殊勝なることは如何なる衆生も唯だ名號を唱ふる外は別のことなきなり。

（念佛往生要義抄、法語抄一一八・一一九一二〇・一二一・一二六）

解說

これは聖者對在家、淨心對妄心の勝劣如何を解決した御法語でありますが、此の外にも定心散心の問題、一念多念の問題、自力他力の問題などが、外の御法語で解決されて居ります。

これ等は要するにまだ「自我心」が心の奥深く巣喰ふて居り、それがむしろ根强い力となつて私達の心を牛耳つて居るからであります。

よく世間では信仰に入れば直ちに淨い心になり隨つて聖者になると考へる向も多いやうでありますが、それは聖道門の考へと混線して居るものであります。淨土門は聖者になる爲のものではありません。されば他の御法語にも「聖道の修行は智慧を究めて生死を離れ淨土門の修行は愚痴にかへりて極樂に生る」と言はれて居りますし、また「念佛の行は水月を感じて昇降を得たり」とも言つて居りますが、「行」とは言つても「信」を主とするもの、隨つてたとへ愚かなものであつても「感應道交」の手段方法でまたそれが直に目的であるのですから別段念佛の信に甲乙はないのであります。

若し信仰を得ることに依つて聖者になり得るとするならば、もうその上は信仰を要せぬことになります。また若し信仰を得ることに依つて妄心がなくなり淨心となり得るならばもうその上には信仰の必要はないことになります。

愚者なればこそ信仰が必要であり、妄心の凡夫なればこそ、如來樣に絶對歸命の必要があるわけであります。

聖者になつて船に乘るのではありません。淨心者になつて願に乘るのではありません。聖者も凡夫も淨心者も妄心者もおしなべて皆な同じ本願の船に同船するのであります。自分の力ではありません。如來樣のおん力にまかせるのであります。こちらが少しばかり、よくなつたとしても、それは罪惡、塵凡夫の域を脫することは出來ません。聖者凡夫も如來樣の前では大同小異の差に過ぎません。

若し自分がよくなつてとか、又は自分の力でとか云ふ考へがあるならば、それは純粹の信仰ではありません。それは自力宗であり自我宗であつて他力宗でも信仰宗でもありません。

念佛して見れば分ります。外目には殊勝氣に見えても、「心には思はじことのみ思はれて」とても仕方がないのです。あきらめるより仕方がないが、さればと言つてあきらめ切れるものではありません。唯だひたすらに如來樣におすがりするより外に手はありません元より「善惡を隔てず、持戒破戒を嫌はず、在家出家を選ばず、有智無智を論ぜず」かるい麻殼も重い石も皆な均しく船にのせて涅槃の岸に運び去つて下さるのですから、その點は絶對安心して、唯だこちらのつとめとしては歸命信順して唱名あるのみであります。いろ〳〵と取り越し苦勞したり、批判がましいことをしたり、小ざかしい理窟を考へたりする必要はありません。そんな暇がありましたらもつと〳〵念佛なさるのがよろしいのであります。

白衣の勇士への「慰問浄土」のお願ひ

すでに御承知の通り各位の御後援によつて本誌が各陸海軍病院に贈られ、「慰問浄土」として白衣の勇士の皆様から喜ばれ、勇士方から澤山の謝狀が來てゐます。また中には病院に來る雜誌の數が足らぬからと直接會費を拂込んで來られ、すでに各病院の中で會員となつてゐる勇士も數多くあります。更にそればかりでなく、「慰問浄土」が緣となつて熱烈な念佛行者となられた方も幾人かあります。

こうした「慰問浄土」に對して陸海軍大臣から贈られた感謝狀だけでも四十數通にのぼり、われわれとしても感激してゐる次第であります。

ところが近時用紙不足のため、本誌の印刷部數にも自ら制限が出來て、「慰問浄土」として病院にゆく數もとかく不足がちであります。このことにつき先月號編輯後記に一言ふれ、御一讀後の本誌を御寄贈願ひ、それを各病院に送りたいとのことを申し上げました所、早速會員各位から多數本誌の御返送を頂き、すでに三百餘部の多きにのぼつてゐます。各位の御熱意にこたへて、これらの「浄土」を各病院に贈りました。

願くば今後とも、お手許の不用雜誌、御一讀になつた「浄土」を當會宛御寄附下されたく、當會はこれを括めて毎月各病院に贈りたいと存じます。しかしこのまゝでは折角の御芳志も先方にとゞかぬ感がありますので、御手數でも御住所御芳名を別欄に御記入願ひます。尚、更に何處か空欄に「勇士慰問の言葉」を御書き添え下さらば受け取つた勇士方はどんなに喜ばれるか判りませんので、この點もお願ひ致します。それから慰問用として御返送下さる際には御手數ながら封の表記に「慰問浄士」と御明記下されたく存じます。

また勝手ながら御寄贈下さる各位の數が大變多く、一々御禮狀を差し上げたくは存じながら事實は困難なので、何卒御寛容下され、一册でも多く精々お寄せ下さるやう願上げます。

（係）

御住所	御芳名

俳壇

雪の道たがひに譲りあひにけり　青森縣平館村　丸尾　傳山

靴草すうや三人けむり冬座敷　栃木縣烏山町　大輪　玄海

菜の御このもし菊の席　名古屋東區七小町　堀端のりを

病床におよべる初日まちもうく　北海道獄舍所　高島喜八郎

鳥の啼くもののあはれも年の暮　京都傷療所　西田　詩葉

鑑の座に征野の父の寫眞笑む　靜岡市　杉浦　敏夫

寒燈はまづしく一家睦まじく　京都傷療所　松村　城南

風あれば焚火にむせぶ涙あり　京都市　近藤　青牛

戰線の子の上に走す吹雪の夜　岡谷市　久保田　鹿

カナリヤに目を閉じ冬の日のぬくし　北海道傷療所　花井　鶴雄

俯へよする夜霧やちちろまぎれみる　京都傷療所　松村　城南

巨椋池白鷺しぐれゐるばかり　同市　同島孝治郎

出しをしむ力もなくて七日月　兵庫縣　太谷　良子

マンゴーの樹々に囀く季節風　北島獄遊兵　福島　綾

枯桑の大いなる月あがりけり　京都　深井　弘鳳

燈炎の掃除屋はしる師走かな　京都　山本　竹桌

竹山に夕陽いだかれ冬に入る　放送局　平井　正念

日曜の醫官も交り栗拾ひ　北海道傷療所　富川　德次

淨土宗日常勤行式

賣價 八十五錢（送料共）

特に一般信徒用として好適です。

申込所 法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館內
振替東京八二一一八七番

會費改正のお願

今度郵税が改正されて、本誌の送料が四月から一部二錢となりますので、本會の一ヶ年會費も金一圓六十八錢に改正いたします。また會費を振替にて御拂込みの方は、振替料金十錢が要りますので、金一圓七十八錢を御拂込み下さい。

尙すでに御拂込みの分は、當方にて計算いたし御通知いたしますが、前金切れが一月早くなる分もあらうと存じます。

新入會の方法

新入會について種々お問合せがありますが、新しく入會下さるには、一ヶ年以上の會費と共に、「新入會」と明記の上、住所氏名をお知らせ下されば結構です。

振替利用の方へ

振替にてお拂込みの際は必ず十錢增にてお願ひします。例へば書籍の御注文には賣價、送料の外に十錢增してお拂込み下さい。

書籍の殘品につき

本會發行の書籍の中で、本誌に廣告のもの以外は全部品切れとなつてゐますので御承知おき下さい

編輯後記

◇皇土の一角、マーシャル諸島で全員戰死が報ぜられました。臨路があるとかないとか云つてゐる時機ではありません。遮二無二猛進し、最後まで頑張り通すだけであります。

◇よく親切心が足らぬといはれます。それも日常瑣事のことに多くしかも案外までに大きな影響を他に與へてゐます。若し合掌する心があつたならと思ふことがあります。信仰は生活の根底です。信仰なき人に報恩感謝はありません。

◇吉田絃二郎先生は仲々の御元氣にて奮闘せられてゐます。御指導の程を深謝いたします。

◇岡本一平先生から御教示や御激勵やら頂いてゐます。それに相變らず御多忙の樣子でしたが、「私ももつと働きますヨ」とのことでした。御健闘を祈ります。

◇眞野正順先生はすつかり御元氣になられ、近く本誌に玉稿を頂くことになつてゐます。（村瀨）

淨土 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十年二月二十日印刷納本
昭和十年三月一日發行
（定價十二錢）

東京都芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼發行人 眞野正順

東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京都牛込區市ケ谷加賀町一ノ二三（東東一）
印刷所 大日本印刷株式會社

配給元
東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館內
振替東京八二一一八七番
會員番號二三〇〇〇七

「淨土」購讀規定

定價 ◉金十二錢（送料一錢）

會費 金一圓五十六錢（送料共）
一ヶ年
振替拂込みは十錢增のこと

中村辨康著

新刊

信仰問答

實價三圓十五錢（送料十五錢）

「淨土」創刊以來連載の「信仰相談」から主なもの約二百を選び系統的に配列しました。誰もが知りたい難問疑義に對し明解を與へた興味深い活きた信仰案内書です。問ふ者が切實な惱みや疑ひをぶちまけてゐるだけ、答へる者は親身になつて懇切に指導してゐます。

總ゆる問題を網羅せる解說

發行所　法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館

振替東京八二一一八七番

東山中學校長　須賀隆賢著・木村毅序

全法然

開宗七百五十年記念出版

實費送料共一圓九十錢

法然上人！智惠第一の御坊と讃えられ、法然具足の聖と崇められた上人は、その聖を去り、その智惠を捨てゝ、凡愚と憂ひを頒ち、衆生と歎きを同うし、人間救濟の新宗教を立てられた、傳記の小說的記述と、平明なる教義の解說と嚴正たる批判と、敬虔なる讃仰と、詩趣溢るゝ感想とを渾然融合せしめたる名著、一卷よく、上人の全貌を悉すところ、即ち『全法然』の題名ある所以、一讀よく上人の偉大に參ぜしむ。

右絕版書ですが手許の殘本希望者に頒つ即刻申込まれよ

申込所　京都市下京區東洞院通鹽小路　三寶社

振替京都九四九三番

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十九年二月廿日印刷納本・昭和十九年三月一日發行

淨土　第十卷・第三號　㊐定價金十二錢（送料）